

文學博士松本榮一著「燉煌畫の研究圖像篇」に對する

授賞審査要旨

スタイン、ペリオ等諸氏のなせる支那甘肅省燉煌千佛洞遺蹟の調査に依り、支那の古代文化に關する新しき資料の發見せられたるもの莫大なる數に上り、世界の學者の之が研究をなす者亦尠からざる状態なり。然るに従來行はれし燉煌繪畫資料の研究は部分的なるもの多かりしが、本書の著者は英佛獨露等の諸國に齎らされたる燉煌畫の實物を親しく調査し、又其後未刊の各種燉煌畫の寫真類をも蒐集し、多年研究に從事して遂に本書を大成するに至りしものなり。

本書は燉煌畫を、主として圖像誌的見地に依て研究し、その畫が如何なる典據を以て作り出され、佛畫として如何なる特色を有し、又印度及び西域諸國の佛畫及び日本の佛畫との間に如何なる聯絡を有するか等の諸點を論述せるものなり。全篇八章より成り、八百十五頁の大冊にして、別冊として添へたる附圖には三百九十五の圖版を收む。第一章は燉煌畫に於ける各種變相の研究をなし、第二章は佛傳圖及び本生圖の解釋及び比較考證等を試み、第三章は尊像圖中の特殊なるもの、即ち圖像製作の儀軌類を以て律すべからざるものを研究し、第四章は羅漢及び高僧圖の考證をなし、第五章より第七章までは密教圖像の研究にして、曼荼羅及び壇樣圖、各種尊像、護符、印契圖等の諸項に亘つて考證を試み、第八章は外教圖即ち佛教以外の繪畫特

に景教關係の畫像を研究せり。

此種の研究は資料の蒐集を最も肝要となすが、著者が之に關して如何に多大の努力をなしたるかは、本文に挿入したる多數の圖版及び附圖を以ても一見明白にして、其資料中には從來世に知られざる重要なものをも含有すること尠からず。又近年燉煌畫の偽作往々世間に散在し、或は無批判に是等を證據として議論をなす者あるも、著者は極めて嚴正なる判定の下に悉く之を排除せり。尙本書は圖像誌的研究を主とするものなれども、藝術史の立場よりして各資料に就き一々製作年代の推定に力を用ひ、同時にその藝術的價值にも論及せり。

燉煌畫中には、從來支那又は日本に於て見る所のものと全く圖像の性質を異にするものありて、解釋に苦しむもの多く、他國の學者もこの困難あるが爲に研究を遂行せざるの狀態なり。然るに著者は博く佛典を涉獵して、妥當なる解釋を施し、殊に從來文獻に所見あるのみにて實例の知られざりしものを發見したるが如きは大なる功績と云ふべし。特に密教關係資料の大部分は、著者の精密なる考察に依り始めてその眞義を發揮したるもの多く、その成果は唐代密教美術研究上多大の貢獻をなすものなり。更に著者は日本の佛畫との關係をも研究し、且つ印度及び西域地方の遺品との比較にも及び、支那畫と西域畫との交渉に關して光明を與へ、若くは唐代に於ける吐蕃佛教美術の問題に關する解決をなしたる所ある如きは注目に値ひす。

本書の研究に對して、更に要望すべきものなきにあらざるも、著者が前人未到の境地に入りて、難解なる

燉煌畫を整理して、その圖像誌研究に確實なる基礎を與へ、東洋宗教史藝術史上に多大の貢獻をなしたるは
推獎するに足るものなり。